



「海福丸に乗った小笠原さん」

深く刻まれた皺のしわ。またたきの白い眉が、過ぎた歲月の長さを物語る。室戸市室戸岬町の小笠原勝さん(89)は70年前の1954年3月、マグロ漁船に乗り、太平洋にいた。客船の「第五海福丸」米蘭によるマーシャル諸島・ピキニ環礁の水爆実験で被災し、日本のマグロを商業することになった船だ。

追憶のマーシャル

ビキニ事件 70年

■ 1 ■



今も日課で海岸沿いを散歩する小笠原勝さん。海の仕事をめぐる日々は変わらない(室戸市室戸岬町)

人は、もうほとんど忘れたと想うねえ」

今や数少ないビキニ事件の証言者。1人で暮らす家のすぐそばに青い海が出る。客船とマーシャルをつ

結木。漁師の父親を持つ6人きょうだいの3番目。戦中教育のため、小学校が国民学校に変わったその1学期生だった。子ども頃からは、船にカトオ船が戻ると、船に飛び乗ってエンジンルームをのぞき込んだ。これが「アイゼルかあ。かっこええなあ」

小笠原さんは、土佐清水市で生まれ育った。旧姓

戦争が終わわり、中学を卒業

米国の核実験

「何も知らされなかった」

業して船乗りになった。最初の1年は清水のカトオ船で「かきぎ」と呼ばれる炊事係。2年目から客船の船に乗った。夏にカトオ、冬はマグロと年々回。漁へ出る。船には乗内外から若者が集まった。

甲板部が機関部と言われ、迷わずエンジンを扱う。機関部を導いた。4時間交代で乗った。

第五海福丸に乗ったのは53年、19歳の時。夏のマグロ漁を終え、翌34年マグロ漁に出発した。その際の行程は、当時の記憶がたつた。故・山本武さん(71)在清水市川が残した日記に詳しく

代の当番が1日に2回回つてくる。先輩の技を見て、学び、覚えろ。機関部長を連れて、体験中も狭い狭い床で寝ていた。

「私が乗った船員には何も知らされなかった」

海福丸は5月13日、ピキニ環礁の環礁に入った。が、漁は続かず続いた。小笠原さんも、漁場ではデブキで他の船員と夜通し話を叩く張り、マグロを獲けた。

大層のマグロを載せた海福丸は4月7日、東京に帰る。船員たちが寝静かに寝ていたのは翌のときだった。

「ワイドウーは毎日大して、漁がない。漁男長も獲がつかず二へと高かった」と回想する。

3月、山口、米蘭はピキニ環礁で水爆「フラッシュ」核実験を行った。その威力は、広島原爆の約10倍とも言われる。小笠原さんは爆音に驚いた記憶も、火柱や



米蘭が実施した水爆実験「フラッシュ」(1954年3月)米蘭立公文書館所蔵。第五環礁(平和記念館蔵)

死の灰を見た記憶もない。それもそのはず、この日、海福丸はまだピキニの港から千キロ北で、ミッドウェーへの幸舟だった。

「私が乗った船員には何も知らされなかった」

(前掲連載)